

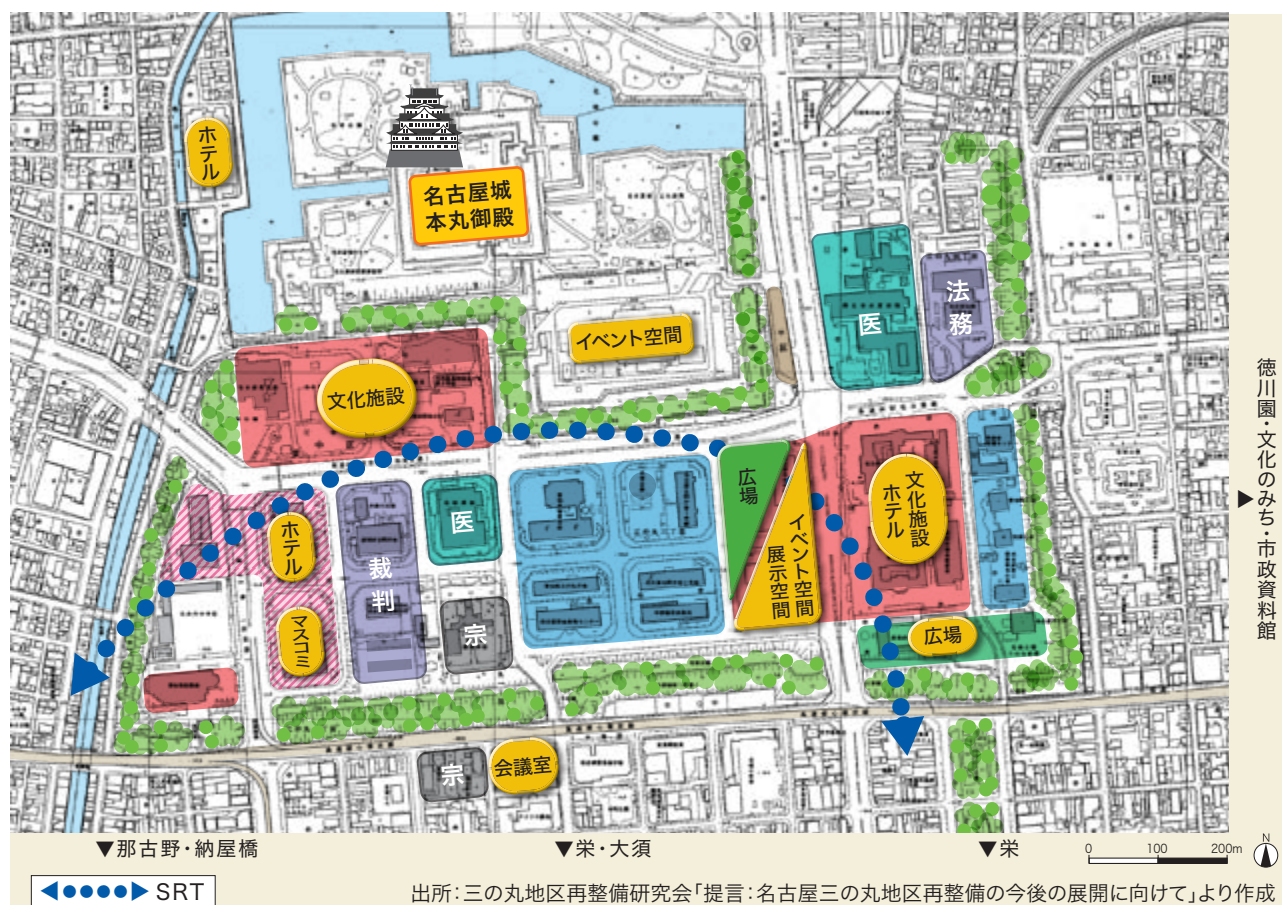
首都圏における大規模災害時のバックアップオフィスとしても機能を発揮する。

また、整備構想イメージ図では、名古屋城天守閣への眺望景観の確保、久屋大通や本町通からの歩行アプローチを意識した景観形成、東西道路への歩行者専用

空間の整備など、三の丸地区の中のみならず、栄などの地区外とのつながりが示されている。

※MICE空間：企業などの会議(Meeting)、企業などの行う報奨・研修旅行(インセンティブ旅行)(Incentive Travel)、国際機関・団体、学会などが行う国際会議(Convention)、展示会・見本市、イベント(Exhibition/Event)を開催する空間

三の丸の基本的な機能配置の構想におけるMICE対応施設



徳川園・文化のみち・市政資料館

リニア開業に向けたまちづくりの動き

リニア中央新幹線の開業に向けて、中津川・飯田のまちづくりの動きが活発化している。いずれの構想も、駅周辺のハードだけでなく、地域の特性を生かしたソフトも重視されており、さらに、既存の市街地や地域拠点など、圏域への広がりも意識されている。

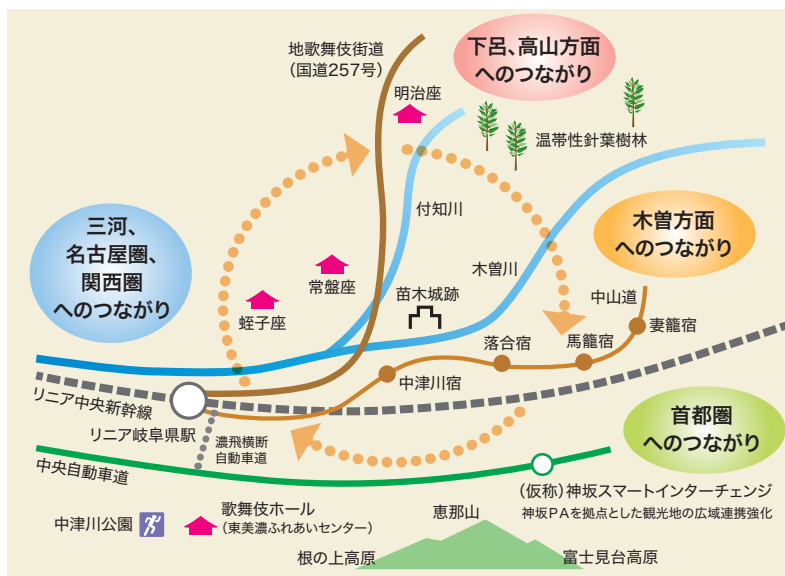
中津川

中津川市が策定した「中津川市リニアを活用したまちづくり構想」で大きく打ち出されているのは、「点から線、圏域への広がり」だ。リニア駅を岐阜県の東玄関口と位

置づけ、人の流れの拠点となる「(仮称)清流の国ぎふ観光ターミナル」を設置し、観光の中核センター機能を持たせる。リニアによって生まれる新たな首都圏・名古屋圏・関西圏などとのつながりと木曽や下呂・高山などのつながりを生かした周遊を活発化させる。地歌舞伎・芝居小屋、街道文化、豊富な自然などの地域資源の魅力を高める。

中心市街地には、市民の交流の中心となる拠点を整備するとともに、リノベーションによるまちなみの再整備も進めていく。地域文化・観光資源などのソフトも重視した構想となっている。

地域資源の魅力向上と広域連携・周遊



出所：中津川市「中津川市リニアを活用したまちづくり構想」より作成

飯田

飯田市では、2010年に「リニア将来ビジョン」で目指す地域像を明らかにした後、2013年から「リニア推進ロードマップ」を策定し、リニア開業に向けた地域の取り組みの工程管理を行っている。このロードマップは、

総合計画「いいだ未来デザイン2028」のスタートにあわせ、2017年度に全面改訂され、PDCAを回しながら毎年時点修正されている。

ロードマップは、「リニア本体工事関連」「社会基盤整備関連」「戦略的地域づくり」の3つが柱となる。「戦略的地域づくり」では、飯田市が目指す「ナレッジ・リンク(知的対流)」の一翼を担う、田園型学術研究都市づくりやリニア駅周辺を中心とした「飯田版スマートシティ」のモデル構築などに向けた取り組みが示されている。リニア駅の駅勢圏(利用が見込まれる地域)を拡大する道路ネットワークの強化、

新しい交通網時代を見据えた移住・定住・二地域居住者を増やすライフスタイルの提案、観光産業を基軸とした交流人口の拡大、産業振興と人材育成の拠点「エス・バード」の機能強化・利用拡大など、リニア駅が設置される地域ならではの取り組みが進められている。

地域の特性を生かしたまちづくり

エリアをつなぐまちづくり

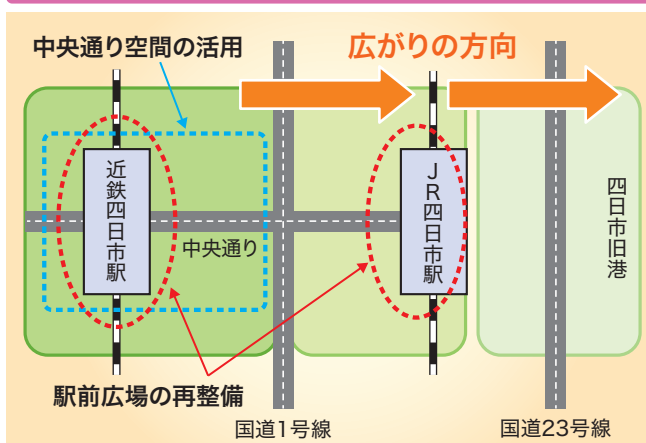
四日市は、三重県最大の人口規模を持つ中部圏有数の産業都市だ。周辺地域の中核的な役割を果たし、その圏域を牽引し続けていけるよう、近鉄四日市駅周辺等整備基本構想検討委員会が、2018年12月に同基本構想を取りまとめた。近鉄四日市駅周辺の機能の再整備とともに、回遊性の向上、交通機能との連動、空間の魅力向上など、構想ではソフトも含め総合的に検討された。

駅周辺の再整備は、さまざまな地域で見られるが、この構想で着目したいのは、市中心部を東西につなぐ幅員70mのメインストリート「中央通り」を生かし、周辺部との景観に配慮しながら、約1km離れたJR四日市駅を含めた空間形成を目指していることだ。さらには、JR四日市駅周辺の再整備、その先には、1899(明治32)年に開港場に指定され、国際貿易港としてスタートし、

今でも当時を忍ばせる施設や文化財などが残る四日市旧港エリアまでつなげる広がりのあるまちづくりも視野に入っている。

既に、市民の交流施設の近鉄四日市駅近隣への移転を具体化する動きが進みつつある。また、近鉄四日市

四日市のエリアをつなぐまちづくりのイメージ



駅東側に計画しているバスターミナルは、今年6月に国土交通省の「バスタプロジェクト」の候補地に選ばれた。このプロジェクトは、鉄道駅と直結する集約型の公共交通ターミナルの整備を推進するもので、事業化されれば、交通の結節点として、飛躍的な機能の向上が期待される。

エリアマネジメントによるまちづくり

静岡市草薙駅周辺地区は、市の東西の拠点となる静岡地区と清水地区の間に位置し、両地区を結びつける地域拠点の役割を担っている。この地域には、静岡県立大学、常葉大学草薙校舎、幼稚園から高等学校まで約1,100人が通う静岡サレジオなどの教育機関が集積しており、市の第3次総合計画では「文教エリア」として位置づけられている。また、駅の南北地区全体では、多くの若者で賑わう「教育文化拠点」を目指した産学民官によるまちづくりが推進されている。

このまちづくりで着目したいのは、エリアマネジメントによる「草薙ブランド」を高める活動だ。商店会、自治会、地元金融機関、学校法人、地元有志で構成される（一社）草薙カルテッドが担い手となり活動を推進している。草薙カルテッドの名称には、草薙の特徴「文化“culture”と教育“education”」の頭文字をあわせた造語と、産学民官の四重奏「カルテット」の2つの意味が込められている。

エリアマネジメント団体として、地域の景観形成に重要な建築・開発や公共施設整備などを適切に誘導する指針づくりにおいて役割を果たすとともに、地域の賑わい創出につながる活動を展開している。大学生などの若者から、社会人やまちづくり活動の市民プレーヤーなどが参加し、生活者目線で地域の未来を語る「草薙イデバタ会議^{ヤマト タケル}」や、日本武尊にまつわる伝説をはじめ自然や史跡などの地域資源を楽しみながら散策する「草薙謎解き街歩き」などを実施している。また、地域



草薙イデバタ会議(上)、草薙謎解き街歩き(下)
写真提供: (一社)草薙カルテッド

が運営する全国初のモデルケース「地域防犯カメラ」の設置や草薙川のライトアップ社会実験など、安心安全・住みやすさにつながる活動にも取り組んでいる。さらには、小学生を対象に、地域への愛着を高めるまちづくりの講話を行うなど、地域の将来を担う世代への啓発活動にも力を入れている。

まとめ

中部圏のさまざまな地域で、地域の資源や機会を生かしたまちづくりが進められている。これらの動きが新たな対流・交流を生み出し、さらにはその地域と地域がつながることで、より大きな対流・交流を生み出し、中部圏の持続的な発展につながることに期待したい。

問い合わせ: 企画部

本特集は、「中部圏の将来ビジョン」(<https://www.chukeiren.or.jp/news/p4257/>)の解説編(本誌2019年9月号)からスタートし、広域的な視点で地域・まちの構造を変革させていく中部圏の地域・まちづくりなどを4回にわたって紹介してきましたが、今回をもって連載終了とさせていただきます。

